

水

水道水をペットボトルに詰めて売るといって怪しい。販売に聞こえるが、そうではない。発売元は地方自治体。原材料も「水（水道水）」と明記されている。東京都水道局のペットボトル入り「東京水」は、平成16年に発売を開始しており、最近でも地下鉄にポスターを貼り出すなど、PRを続けている。

「東京の水水道水」と言われれば、「まずい、カルキ臭い」というイメージが否めない。だが、何も知らずに「東京水」を飲んでみると、市販のミネラルウォーターと区別がつかないほど。その割には実際に買って飲んだ人は少ないようだ。なにしろ東京都庁や都立病院など、都の施設と通信販売くらいでしか売っていないのだから。

では、なぜ東京都は広告まで作ってPRしているのだろうか。

東京都水道局は平成16年から「安全でおいしい水プロジェクト」を推進し、蛇口回帰を呼びかけている。つまり、ペットボトル入りの水道水は、家庭や職場でもっと水道水を飲んでもらうというキャンペーンなのだ。

最近の調査では、水道水を「全く飲まない」と答えた人と「ほとんど飲まない」人を合わせると7割強。「よく飲む」と答えた人は1割に満たない。しかもこれは全国規模の調査のため、都心部に限れば、ほとんどの人が水道水を飲んでいないに違いない。

生活の向上に伴って伸びてきて

東京都水道局

「東京水」
500ml ペットボトル
定価 100円（税込）

オゾンと生物活性炭を使った二重の高圧浄水処理が施された水道水をペットボトルに詰めた「東京水」。通常のミネラルウォーターとほとんど変わらないレベルに達している



東京都水道局

「安全でおいしい水プロジェクト」ポスター

東京都水道局は、より安全でおいしい水道水を蛇口から供給する「蛇口回帰推進計画」に取り組んでいる。はたして、「カルキ臭くてまずい」という水道水のイメージを払拭することができるか？



モクロクの 広告批評

“東京の水は不味い”は昔の話？

「安全でおいしい」という東京の水は ホントに飲める水になったのか

「まずい」「カルキ臭い」「カビ臭い」と言われ続けた水道水が、
いまではペットボトル容器に入って売られているという。
しかしなぜ、東京都は水道水をそこまでして売ろうとしているのだろうか？

文=六本木博之(フリーライター)



は利根川水系の全浄水場に完備する予定になっている。

そこで改めて、自宅の水道水を飲んでみた。カルキ臭もなく、まずいというわけでもない。だが、ペットボトル入りの「東京水」とは、まったく違う気がするが……。

「東京水」は、超高度浄化処理された水をそのまま詰めているのに対し、水道には消毒用の塩素を加えて供給されているのだ。

だが、それ以上に大きな要因として、水問題を専門とするジャーナリストの橋本淳司氏は、水道管のさびや集合住宅などの給水タンクの状態が影響する可能性がある」と指摘する。水道管は水道局がメンテナンスをしているが、問題は給水タンクだ。

「給水タンクは、さびや汚れ以外にも、雨水や鳥の糞や虫の死骸が入ってしまう可能性があります。昨年、商業施設の給水タンクから遺体が見つかるという事件がありました。給水タンクの管理責任は所有者や管理者にあります。タンクの点検は努力義務でしかなく、罰則規定もないのが現状です」

東京都は高層建築物の給水方式を、給水タンク方式から、上層階の蛇口までポンプで水圧をかけて直接供給する増圧直結給水方式に切り替えるべく、普及を図っている。その工事費用は一棟あたり数百万円はかかるのだが……。

おいしい水が飲めるのは大歓迎だが、我が家の給水タンクはどうか、上を見上げて折るしかない。

た日本人1人当たりの水道使用量も、90年代から横ばいになり、2000年以降は減少している。90年代といえば風呂なしアパートが激減し、朝シャンが定着した時期なのに伸びが止まったというのは、水道水を飲まなくなったことが最大の原因といえそう。

実際、ミネラルウォーターの国内生産量や輸入量を見てもよくわかる。両者の合計が、2007年の時点で1991年の10倍近くになっているのだ。

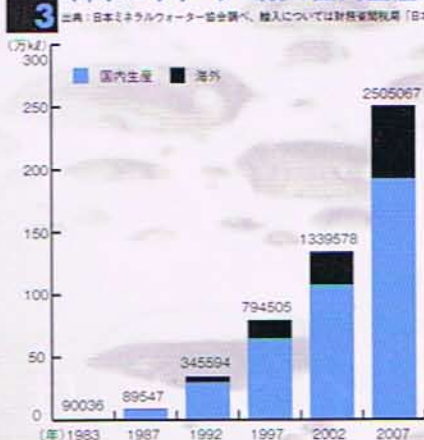
都市生活において水道は不可欠なライフラインだ。災害で流通が止まったり、戦争や世界的な水不足で輸入がストップしたら、ミネラルウォーターに依存した生活は維持できない。だからこそ、水道水をPRしておく必要がある。

かつて「まずい水」の代表だった東京の水も、状況は大幅に改善された。東京の水道水は、主に利根川・荒川・多摩川の水系のものを浄水して供給しているが、とくに利根川水系の水は評判が悪かったという。

そこで東京都は主な浄水場にオゾン処理と生物活性炭処理という二重の処理設備を設置し、超高度浄水を行っている。その結果、カビ臭さの原因物質2-メチルイソボルネオールや消毒用塩素と結合してカルキ臭を発生するアンモニア態窒素などを、水道水から完全に除去することが可能になった。

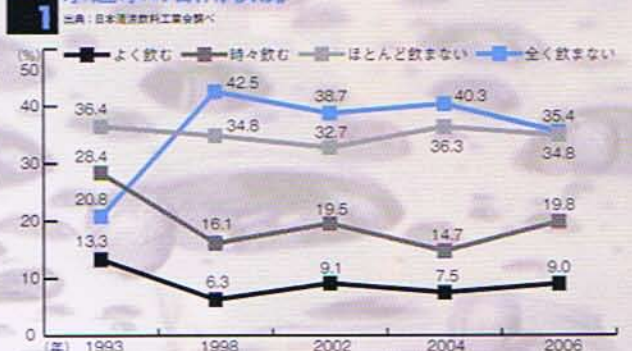
この超高度浄水処理は、これまでに金町・三郷・朝霞・御園の浄水場に導入され、平成25年までに

DATA 3 ミネラルウォーター類の国内生産と輸入の推移(数量)



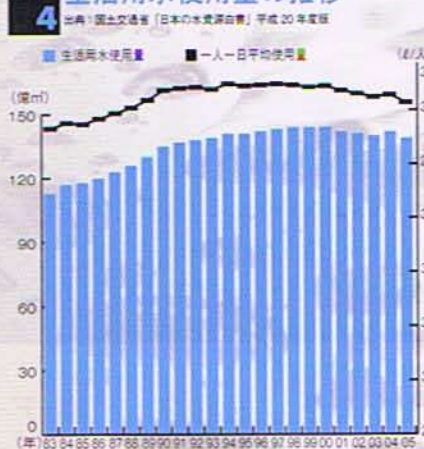
1983年に比べて2007年の国内生産・輸入量は30倍近く、とくに90年代の伸びが著しい。日本は世界的に見ても水資源の豊かな国だが、その水も次第に輸入に頼る傾向が強まっている。80年代にはごくわずかしかなかった輸入量は、2007年には国内シェア23.2%を占めるまでになった。あまり輸入に頼ってばかりだと、国際情勢などの影響で輸入量が減った場合には大きなダメージを受けかねない。

DATA 1 水道水の飲用状況



1993年の調査では、水道水を「全く飲まない」と答えた人が2割だったが、わずか5年で4割を超えている。90年代は水道水離れに拍車がかかった時期といえるだろう。水道施設の改善もあったためか、2006年はやや持ち直しているが、「ほとんど飲まない」と合わせると7割に達する(15～59歳対象)

DATA 4 生活用水使用量の推移



1965年の一人一日平均使用量は169Lで2005年の半分程度。生活用水使用量の向上もあり1990年ごろまではほぼ順調に伸びてきたが、その後は横ばい状態。2000年以降、徐々にいずれの数量も減少傾向に入ったように見える。近年は夏季と冬季の水道使用量の大きな差がなくなってきているというが、ペットボトル入り飲料の普及で、水道水を飲まなくなった影響と見ることができよう。

DATA 2 ペットボトル入り飲料水の栄養成分(100mL当たり)

	東京水 (東京都水道局)	天然水南アルプス (サントリー)	六甲のおいしい水 (ハウス食品)	エビアン (フランス)	クリスタルガイザー (アメリカ)
エネルギー	0cal	0cal	0cal	0cal	0cal
ナトリウム	1.22mg	0.65mg	2.55mg	0.7mg	1.13mg
カルシウム	1.92mg	0.97mg	0.65mg	8.0mg	0.64mg
マグネシウム	0.43mg	0.15mg	0.37mg	2.6mg	0.54mg
カリウム	0.19mg	0.28mg	0.08mg	—	0.18mg
硬度	65.5mg/L	約30mg/L	約32mg/L	30.4mg/L	38mg/L
pH値	—	約6.7	約7.2	7.2	—

「東京水」は、国産のポピュラーな2種類のミネラルウォーターより硬度が高く、栄養成分もとくにカルシウムが豊富で、平均して多く含まれるといえるだろう。味もほとんどミネラルウォーターと遜色なく、水道水といわれなければ気がつかない。各データは商品の栄養成分表示より

★ 水道水のおいしさはどこで見極める？

水道水の水質が問題になっていた1984年、当時の厚生省水道環境部は「おいしい水研究会」を設置し、「おいしい水の要件」を公表した。この要件が、現在も日本における水の味の基準となっているといえるだろう(海外のミネラルウォーターの硬度はこの基準をはるかに超えるものが多い)。現在の東京都の水道水は、ほぼこの基準をクリアしているが、消毒用の残留塩素だけはまだやや高め。塩素の匂いが気になる場合は、半日以上汲み置きしておく匂いがとれる。お湯を沸かしても残留塩素はなくなるが、橋本淳司氏によれば、沸騰させると水のうまみ成分である遊離炭酸(炭酸ガス)も空気中に放出されてしまうため、多少うまみに欠けるという。沸騰させてから一晩置いておく、空気中の炭酸が再び水に吸収されて味が戻るそうだ。

	おいしい水の要件*1	水道水の水質基準	東京都三浦浄水場出口*2	世田谷区桜丘の蛇口*2
蒸発残留物	30~200mg/L	500mg/L以下	130mg/L	170mg/L
硬度	10~100mg/L	300mg/L以下	63mg/L	68mg/L
遊離炭酸	3~30mg/L以下	20mg/L以下(目標値)	2.0mg/L	—
過マンガン酸カリウム消費量	3mg/L以下	10mg/L以下	—	—
臭気度	3以下	3以下(目標値)	1	1
残留塩素	0.4mg/L以下	1mg/L程度(目標値)	0.6mg/L	0.6mg/L
水温	最高20度以下	—	—	—

*1 厚生省「おいしい水研究会」(1985年4月) *2 東京都水道局平成20年第1回半年水質検査結果
浄水場・蛇口の過マンガン酸カリウム消費量は、水質基準調査の全有機炭素検査で代用されるため省略されている